まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL56

温泉郡中島町

特集 ローカルに生きる

―地域の足下を見つめて―

- 棚田を守る・御祓を守る
- 魚島村はわったかったの大騒ぎ
- 切山の村おこし―「にこにこ市」開催を通して―
- 遊子に生きる
- 癒しの里・漆の梅の里づくり

論談 まちづくり―
過疎を逆手にとる会　和田　芳治

■キラリ光るまち
宮崎県　綾町

好評連載
★歩キ目デス＆足ラテス
岡崎　直司

アングル
見えないものへのまなざし……日本現代詩人会会員／堀内　統義……1
特集『ローカルに生きる』
ー地域の足下を見つめてー
棚田を守る・御祓を守る……五十崎町／季羽　浅喜……2
魚島村はわったかったの大騒ぎ……魚　島　村／西岡　勝彦……4
切山の村おこし―「にこにこ市」開催を通して―……川之江市／真鍋　潤……6
遊子に生きる……宇和島市／藤田　光弘……8
癒しの里・漆の梅の里づくり……中　山　町／上ノ田誠一……10
論談ーまちづくりー
君が輝けば……過疎を逆手にとる会（広島県総領町）／和田　芳治……12
キラリ光るまち
照葉樹林都市・綾……宮崎県綾町／黒木　政則……14
リレーでちょっトーク
商店街のお寺として……伊　予　市／高橋　宏文……16
走る、動く、叫ぶ……松　山　市／野本めぐみ……17
いきいきグループ紹介
豊友会……長　浜　町／大本　昭裕……18
研究員レポート
臼杵のまちづくり……井上　正男……20
「えひめ地域づくり研究会議'97フォーラム」レポート……伊手　博志……22
MY TOWN うぉっちんぐ
歩キ目デス＆足ラテス……岡崎　直司……24
Information
媛のくにフラッシュ〈川内町・保内町・丹原町・伊方町〉……26
まちセンからのお知らせ……28

特集「ローカルに生きる」
今号のテーマ　地域の足下を見つめて

まちづくり・むらおこし事業の展開により、地域でもハード面の整備はそれなりに進んできたように思いますが、活性化への道はなかなか険しく、いわゆる過疎地域では、集落が消えつつあるところさえあります。

地域で生きるためには、地域に愛着を持ち、自分の生き方に自信と誇りを持てるようにならなければ、地域を次代に引き継ぐことなどできないようにも思います。

そこで、今年度の特集のテーマを「ローカルに生きる」とし、その初回となる今号では「地域の足下を見つめて」と題して、地域の中の地域で頑張っておられるところに、焦点をあてて、特集を組んでみました。

（編集子　ff）

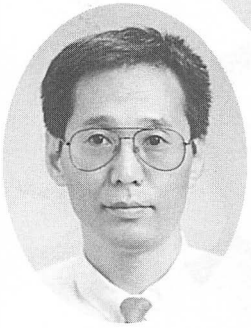
表紙の言葉

中島にフェリーで着く。港は、一見どこも変わらぬ風景。小高い山に入る。収穫期を終え、段々畑のみかんの木は青々と天に届くが、地肌丸見え。台風でやられ植え代えたのです。甘いみかんを作る汐風も時には大きな被害をもたらした。苗木が育ち実を付ける頃、島の若者が、十分に後継出来る事を願ってます。

柳原　あや子

『見えないものへのまなざし』

日本現代詩人会会員
堀内　統義



若いころから、詩を書いたり読んだりすることに、喜びを感じてきた。

日常の世界に生きていると詩などは非実用、無用のものと思われがちだ。

しかし、遠い昔から「詩」は、わたしたち人間の心をとらえ続けてきた。

疲れた心を潤し、慰め、元気付け、人の心を動かす不思議なはたらきを、詩はそのなかに秘めている。

そんな詩の秘密を考える文章に触れえたときには、心おののくものがある。

思いおこすと、たとえば大岡信さんが、染織家の志村ふくみさんを紹介されている講演記録に目を通したときなどは、まさに、その最たるときであったような気がする。

志村さんの作品に、萌え立ち、燃え立つような桜色のキレがあって、大岡さんはその色合いの見事さに心をとらえられたという。

その色を桜からとったと聞いた大岡さんは、とっさに桜の花びらからだろうと思ったのだが、実は、幹の皮を煮つめ、媒染剤によってその桜色がとりだされる。

志村さんによれば、桜の皮とはいっても、一年中どんな時期でも、その色が得られるわけではない。花が満開となる直前の時期だけ、そうしたすばらしい色合いに出会える。

つまり桜は、花びらだけが人々を魅了するあのような色になるのではない。

春には、根も樹皮も樹液も木のすべてをあげて、淡いピンクになろうとする営みが、木のなかで行われているということなのだ。

私たちの目には見えないけれども、そのとき桜は全身でピンクに染まろうとしている。染織家である志村さんは、そのことを熟知していて、その時期の桜から、自分の作品を創造していく。

詩人の大岡さんは、桜にひそんでいる目に見えない色を見事にとりだす染織家の仕事に、深く心をゆさぶられたという。

このことから大岡さんは思う。数学者であろうと、スポーツマンであろうと、芸術家であろうと、日常うっかり見過ごしてしまいがちな何かを、しっかりと見据えることができて、はじめて真の存在となるのであると。

志村さんが手を加えることで、黒褐色をした木の幹の皮から思いがけない色を取りだすように、人はそれぞれのやり方で、現実に対して手を加えていく。

ノヴァーリスというドイツの詩人が「すべての見えるものは見えないものに、聞こえるものは聞こえないものに、感じられるものは感じられないものに付着している。おそらく考えられるものは考えられないものに付着しているだろう」と言っている。

これは、地域の振興というテーマについても、おなじことが言えるのだと、そんな思いにかられるのである。

特集

ローカルに生きる―地域の足下を見つめて―

棚田を守る 御祓を守る

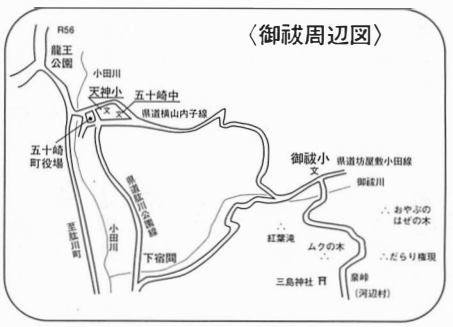
御祓色々話す会
世話人　季羽浅喜

御祓（みそぎ）は五十崎町中心より東へ八キロ登った谷間の部落で、以前は御祓村として全部の施設がありました。私はそこで棚田を守り無農薬で米作りをしている者です。無農薬米作りは三十年前より健康を思い取り組まれている方の指導で研究をしています。

青年から老人まで誰でも気軽に参加出来る「御祓色々話す会」は、毎月第一火曜日に集まり、無農薬米作りや最近の話など色々な事を持ちよって話し合うのです。山間部の者にとっては良い話場として十年以上一度も休まず続けています。昨年から和歌山県より青年が二人移住され、私達に元気をつけて下さっています。

棚田米の一年

棚田は竹一本の出水を水源として八十枚の水の管理を行うもので、沖田の十倍以上の人力を要しますが、観光者はその美しさに感心されているようです。米の品種は御祓一号御祓二号でいずれも酒米の良い品種です。七人の無農薬米作りの者が亀岡酒造と契約栽培を行い、丁寧に選別した米を引き取って戴いております。無農薬米作りは土作りから始まるのですが、幸いにして畦によもぎを始め薬草が数多く育っているので、これを入れて数回耕して病虫害に耐える土作りを行います。



五月には種蒔きです。私は荒田に種を蒔きそのまま育てます。六月ホタルが舞い上がる頃になると田植えの始まりです。昔ながらの手作業で苗を取り、印縄を引き手植えで行います。昨年は松山より津軽三味線を弾く方、又島根県より料亭の方々が田植の応援に来られ、田植長靴をはき、土まみれにて、虫にかまれ日に焼けながら植えて戴きました。早々田植が終わり、田植を習ったお礼に津軽三味線を弾き聴かせ田休をするとの話になり、百人近くの人々が集まり夜ふけまで豊年願いでにぎわいました。

田植えの風景

水の管理はこれからがたいへん。三ヵ月間朝夕一日二回、稲に「元気か、病気ではないか、虫はいないか、水はあるか」と話かけながら見回るのです。草取りは六回行います。是も手作業です。田の中のタニシ、イモリ、鯉の子、カニ、ヒル、カエルと共に田の中をまぜ草取りを行うのです。田の中に入る清水を呑み汗をふきながら土まみれになって行っています。一番心配は秋、ウンカの襲来です。これが来れば数日の内に全滅になって酒米に

はなりません。最近はウンカの被害もなく良い酒米が出来ています。

十月になれば稲刈りです。刈った稲は稲木にかけ天日で二十日以上干し、天候を見ながら米にします。そして全員集まって今年の天候と良品の研究をしながら納品です。私の農法は太陽、水、土の自然農法が大切と思っています。

納品も終わり十二月には十年続く豊年棚田祭オニギリパーティーです。御祓で取れた物を持ちより全部竹の食器に竹の皮、米は棚田のコシヒカリ、料理にはキジ、ゼンマイ、コンニャク、キリボシ、竹ノ子、野菜、酒はもちろん御祓で作った無農薬酒です。五人集まって準備を始めますが、次々と集まって五十人近くになり夜のふけるのも忘れて話に花を咲かせます。一昨年はNHKの方が来られ、その模様を全国に放映されました。又昨年は外人さんが数人見えて外国とのまさに国際化を感じて驚き感謝をしています。

御祓の四季・見どころ

また四月二十一日には、ミニ八十八ヵ所めぐりがあります。山合いの小道を八十八ヵ所全部お参りをしながら六キロ四時間がかりで歩くのです。途中六ヵ所でお接待を戴きながら山菜を取り、色とりどりの落ち葉をふみしめて歩く姿は、町ではみられぬ御祓の自然の姿ではないでしょうか。百三十一年も休む事なく続いています。

もみじ滝は高さ十七メートルあります。水清らかで滝祭りが七月にあり、滝でビールを冷し、水しぶきをあびながら夏の涼しいひとときを過ごします。秋になれば、もみじ、いちょうが色づき、その景色は滝の名そのものです。

坂本竜馬の宿の地は泉ケ峠にあり、昭和時代まで宿屋や小店があって牛馬が一日五十頭通る大通りの交差点でした。冬雪が降れば氷がはり、一ヵ月は交通止でした。今は坂本竜馬脱藩の道として知られています。

だらり権現は岩をかぶり、トンネルをぬけ、ハシゴ二本とクサリを二個登り山の頂上へ登れば、本山石鎚山が見えるのです。その岩の美しさは御祓ならではないでしょうか。七月十日の大祭でにぎわいます。

三島神社は郷社で境内そのもの郡内最大のもので、文化財に指定されています。大祭は十月二十一日郡内の人々が集まりにぎわいます。

椋の木は根回り九・五メートルあり、五十崎町最大の木として親しまれ、町の文化財として指定されています。

ハゼの木はオヤブにあります。町の最東端にあり、年間百貫実を取っていたとか。ローソクの有りがたさを物語っています。是も町の文化財に指定されています。

私は二十年前、空高き丘の丸山城、水清らかなもみじ滝をむすぶ、みそぎ河原の常盤大橋、又「美しいみそぎを未来へ」と字を入れた食器を一万個作り全戸へ十年かけて配り続けました。時の流れで過疎になりつつありますが、御祓を守る人々と観光地、美しい自然の御祓は消える事はありません。

一度来て見て下さい。一時間でも二時間でも御祓の人口の増す事を楽しみにしています。

御祓の棚田

特集

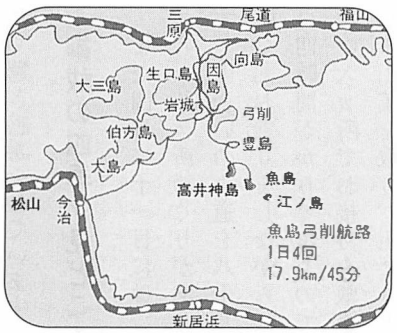
『魚島村は わったかったの大騒ぎ』

魚島村役場　西岡勝彦

魚島村は燧灘のほぼ中央に浮かぶ魚島、高井神島の有人島といくつかの無人島で構成された一七六世帯人口三五四人の小さな村です。

産業は漁業のみで「小型定置網」で捕れる桜鯛は広島県に出荷され関西方面で高値で取り引きされていますが、残念ながら県内には出荷されていません。

気候穏やかな大変のどかな村ですが、高齢化率は四一％余り出生数も生まれても年に一人という状態が続いており、平成二年国勢調査の人口四二八人と比べると一七・三％もの減少率です。特に高井神島の高齢化率は五〇％を越え、八〇％の人が五〇歳以上という超高齢社会になっています。



ローカルに生きる―地域の足下を見つめて―

ホームページ公開

魚島村では平成八年五月に県下で二番目（当時東予市さんが試験的に公開していただけ）の公式ホームページを公開しました。

公開後、全国から「見ましたよ。小さい村でも頑張って下さい。」と激励のメールをたくさん頂きました。また、Yahoo!Japan社のクールサイトに選ばれるなどの評価も頂き、ネット上では有名になることができました。「村が作る目立つだけのホームページ？」と思われる方も多いと思いますが、小さな村が観光宣伝に莫大な費用を使うのは不可能なわけですから、少ない費用で数万人の方に見てもらえるホームページはすばらしい救世主であったわけです。

村民募集

結構目立ちたがり屋（怒られそう）の村長は結構人気のホームページに味を占め、芸名の城山太郎で無理矢理ホームページに登場するのは当然の成り行きと言えるのですが、次なる宿題が高井神中学校の生徒が卒業するけどなんとかしたいので村民募集をしろとの命令でした。

折しも高井神島には村営住宅を建設中で住むところもあり、高井神中学校のホームページに「学校を守りたい。」と募集しました。ネット上で知り合いになった自称「魚島村ファンクラブ東京支部長」さんや慶応義塾大学の先生が応援して下さり、結構ネット上でも話題になり朝日新聞社の記事にもなりました。記事が出た翌朝は電話が鳴りっぱなしの状態で、対応に追われるほどの反響があり、インターネ

高井神島の村営住宅

ットでもasahicomで紹介されたため、週間アクセス一四〇〇件を記録し、多くの問い合わせのメールを頂きました。

この結果として高井神島に二世帯五人と先生二人の計七人の人口増加がありました。また、高井神島には保育所が無く幼児をお持ちの家族の転入は難しいので魚島にも二世帯八人の転入がありました。

しかし、話題性だけでは無理で十年度の募集では問い合わせはありますが、未だ転入が決まった家族はありません。やはり、就業先が限られているのが一番の問題になります。いくら自然が好き、魚が好きと言っても都会からいきなり田舎に引っ越してきて、農業や漁業で生計を立てるのは不可能に近いと思います。

田舎は不便で住み難いのは確かですが、都会はもっと住み難く、結構多くの人が自然の中で生活したい、子育てをしたいと思っているのが村民募集を通してわかりました。村ではこれからも引き続き各学校へ受け入れていく予定ですが、村民募集か、家族留学か、子供だけの留学か受け入れ方法を模索中です。

わったかったーズ誕生

インターネットの活用は村民募集だけではありません。何とかインターネットを活用して村おこしが出来ないかと、平成八年十一月に村おこしグループ「わったかったーズ」が誕生しました。メンバーは元々公民館のインターネット教室の受講生で、役場職員、保母、郵便局職員、旅館の若女将などで構成されています。活動の内容は魚島村ファンクラブというホームページを開き、村制百周年にちなみ百人の会員を募集し、村花・水仙の球根プレゼント、特産品〝でべら〟の格安での試験販売、会員の皆さんに魚島の旬を味わって頂くファンの集いの開催などを行っています。

会員は現在一〇五名で全国各地及び海外在住の日本人の方もいます。咲いた水仙の写真をお送りいただいたり、遙々山形県から家族で遊びにお越し頂いた会員の方もいます。

今後、会員の輪を増やそうと計画中で、今年もファンの集いを盛大に行いたいと思っています。

利用状況

現在、教育用コンピュータの導入状況は魚島中学校が生徒六名にwindows系マシンが六台と「こねっとプラン」で頂いた一台を加えた七台、魚島小学校が児童十七人にMacintoshが五台、高井神小学校と高井神中学校は児童・生徒それぞれ一名にMacintoshが三台で、インターネットにはそれぞれISDN回線で接続することができます。

一般家庭への普及率はそれほど高いとは言えませんが、十五世帯がインターネットに接続できる環境にあります。

最後に

へき地・離島にとってインターネットは時間的距離をなくす革新的なメディアですが、雨後の竹の子のように増え続けるWEBサイトの中で人気サイトになるのは不可能であり、お堅いイメージの自治体公式ホームページで存在意義を出すのは、やはり住民参加のホームページである必要があると思います。今後は魚島村民の公式ホームページとして、より楽しい顔の見える情報発信をしたいと考えていますが、やはり、基幹産業である漁業の振興にどう結びつけるかが問題であります。

/// “わったかった”とは？ ////

魚島の古い方言で、「思わぬ大金が転がり込んでわったかったの大騒ぎ。」のように使います。

魚島村ホームページ

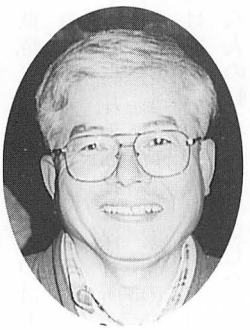
http://www.islands.ne.jp/uoshima/

特集

『切山の村おこし』

―「にこにこ市」開催を通して―

切山にこにこ市運営委員会
代表　真鍋　潤

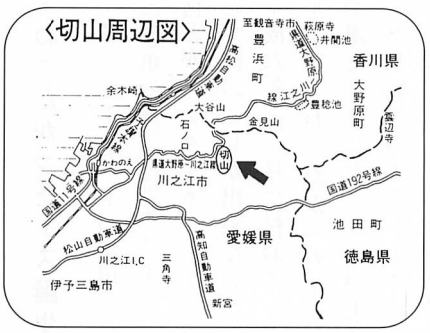


ローカルに生きる―地域の足下を見つめて―

平家の里切山と重文真鍋家住宅

切山（きりやま）は愛媛県の最東端香川県との県境に位置している。

現在三十戸の民家が点在しており、古くから平家伝説の地として知られている。又切山には昭和四十五年六月に国の重要文化財に指定されている真鍋家住宅があり、およそ四百五十年前に建てられたものと推定されており、年間約三千人の方々が訪れている。昨年の十一月には県道大野原―川之江線が開通し、香川県から訪れる人も多くなっている。



にこにこ市開催の提案

切山では毎年三月末に地区総会が開かれるが、昨年の総会で「にこにこ市」開催を提案したところ、一応賛同が得られ、運営委員会を発足させ、開催要項等について検討した。

基本的なおさえとしては、

・心のこもった品物をだすように心掛ける。

・長続きして行くような取り組みをして行く。

・そのつど反省会を持ち次回に生かして行く。

・出来る限り参加し、準備、後片付け等協力しあう。

にこにこ市開催

九月開催に向けて取り組んでいたところ、委員の中から、大体話がにつまって来たので開催を早めて五月五日の、自治会・平家遺跡保存会主催の「金見山・大谷山ハイキング・登山」の日にためしに開いてみてはどうかという意見が出て、皆も賛同し急に開くことになった。

当日は天気もよく市内外から百名余りの参加者があり、地区の方々が心を込めて手作りした品々を並べたところ、ほとんど売れ、しかも買った方々から大変喜ばれ、これならやって行けるのではないかという見通しがついた。市が終わった後の反省会では、六月からは毎月第二日曜日の午前中の十時から十二時まで開いていくことにし、次のことを決めた。

主催・切山にこにこ市運営委員会（代表　真鍋潤）

後援・切山自治会、川之江市農協、平家遺跡保存会、ふるさと振興会、婦人会、農協婦人部、老人クラブ、土曜会、生活改善グループ

真鍋家住宅

目的・ねらい・切山地区の各家庭でできた手作りの品を販売することによって多くの人とふれあい、交流を深め、地域住民や高齢者に楽しみや生きがいを与え、地域理解と今後の村づくりに役立てる。

方法・切山の各家庭（三十戸）でできた手作りの品を持ち寄り、それなりの値段をつけ、それぞれが時間内に販売する。又販売を代行することもある。

宣伝・市の公報、各新聞、テレビ、ラジオ、ポスター、ビラ、関係団体、知人等への呼びかけ、働きかけ。

開催後の様々な課題と対応

にこにこ市を毎月開いていく中で毎回様々な問題や課題等が出てくる。それらを「反省会」や開催前の「準備会」で出し合い、皆で協議しながら問題解決に向けて取り組んだり、意志統一をはかってはいるが難しい問題もある。

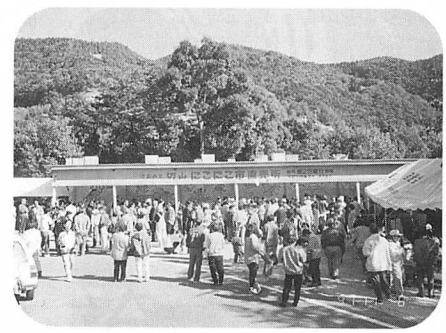
それらの中で解決した大きなものとして、屋根付き店舗（直売所）の建設である。毎回の市開催の前日には役員が出てテント張り等の準備をしていたが、毎回になるとかなりの負担になっていた。何とか解決の方法はないものかと検討したところ雨の日でも開いて行くためにも屋根付き店舗を自分達で建ててみようと話が決まった。自治会から資材購入の費用を出してくれることになり、地区民が労力を出し合い、自分たちの手で一ヵ月かけて安くて立派な店舗が完成した。市に訪れた人々はこの店舗を見て皆一様に驚き、村の方々も力の結果の大事をわかり、大いに自信を得、毎回の開催が軌道にのって来た。

今後の課題と展望

近年多くの地域で村おこしに向けて様々な取り組みがなされており、そのための様々な市が開かれているが、たいていは人が沢山集まる、人通りの多い所で多くの人々が関わって、それなりの成果を得ているが、切山の場合はその逆で、人気のほとんど無い所に人を呼んで来る、来てもらう、又それに対応する人も少なく、「切山でよう開けているなあ」とよく言ってくれる。そういうこともあってマスコミ等で度々取り上げてくれたり、他地域からも視察に来たりしている。

今まで毎回続けて開催出来たのは、毎回手づくりの品物を出してくれる約半数の地区住民が居ること、他地区の人も出店に協力してくれていること、役員を中心に意欲的に取り組んでくれる人が居ること、又この市を様々な面から支援してくれている多くの方々が居てくれること等々切山では色々な好条件に恵まれていることの総合的な成果と思う。

毎回二百名余りの方々が来てくれているが、今後さらに発展して行くためには、特産品づくりとそれに見合う収益等のことも考えて行かねばならないと思う。とにかく続けて開いて行くところに大きな意義があると思う。


「にこにこ市」開催風景

私は昨年の四月から単身で奈良から切山に帰り、母の介護や重文真鍋家住宅の管理等のかたわら、この「にこにこ市」のお世話をさせていただいているが、十分なことが出来ないでいる。しかしこうした取り組みを通して多くのことを学ばせてもらっている。地域全体が少しでも活気付き、少しでも発展してより住みやすい地域になって行ってくれることをいつも念願している。

『遊子に生きる』

宇和島市　遊子
漁業　藤田光弘

村おこし十年

「村おこし」、青年団、漁業後継者の活動が一段落していた私に、心地よい響きを伝えてくれたのが十年前のまちセンのメンバーであり、眠っていた心に、おおいに刺激を与えてくれたのが、遊子でのシンポジウムに参加して頂いた県下各地のユニークな言葉でした。ある人の言葉、「遊子の段畑に説明はいらない、ただすごいの一言だ。」

根が単純な私は、すぐにメンバーをつのり、段々畑の草刈り、和太鼓チームの結成、その他いろいろと、遊子の心を起こそうとやりました。

あれから十年、今現在活動しているのは和太鼓のチームだけ、そんな自分が今さら『舞たうん』にえらそうなことが書けるはずもないのですが、自分のように打ちひしがれながらも、また、何かやりたいと思っている人が、他にもたくさんいるのではないかと思い引き受けました。

二つのふるさとの姿

「ローカルに生きる」　四国のはずれに生れ、一度もふるさとを離れるチャンスもないままに四十年間生きてきましたが、私の知るふるさとは二つあります。

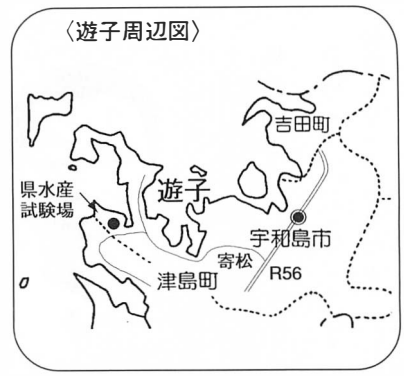
子供の頃魚が全然とれなくなり、多くのまき網が倒産し、遊子漁協がつぶれ、ほとんどの働き手が出かせぎに行き、残された女、年寄り、子供達で、段畑を守りながら、日本一の貧乏村宇和海村遊子地区は、人間の数よりネズミの方が多いと言われニュースになりました。サツマイモ、イリコ、麦飯を主食に、今ふり返ってみるとひどいものでしたが、不思議とその当時はそれが当り前で別につらいとも思いませんでした。

春には宇和島駅のホームで当時金の卵といわれた集団就職で出ていく近所の兄ちゃん姉ちゃんを見送りながら、自分ももうちょっとしたら出て行くものだと覚悟していました。それが子供心に残っている一つのふるさとです。

もう一つのふるさとは、日本の高度成長のあとを追うようにして伸びてきた、昭和四十年後半からの真珠・ハマチによる好景気の遊子です。

「この田舎で、都会の一流企業に働く部課長以上の年収をあげよう」古谷和夫氏（当時漁協専務）の号令のもと、

龍王太鼓の面々



富に飢えていた漁民たちはモーレツに働き、美しい海にも恵まれ、養殖漁業は、遊子の歴史にかってない繁栄をもたらしました。

新築ラッシュが続き、海には大漁旗がなびき、皆高級車に乗り、パチンコ・ゴルフ・酒・〇〇〇・夜の盛り場でもモテた人が多かったようです。

不況という言葉を忘れていたわけではないのですが、ぜいたくが当り前になり、多くのあやまちを犯した二十年でもありました。家の柱も、車も、夜の支払いも全て海からかせいだお金です。

最初はルールを守り、わきまえてもいましたが、好況の波にのまれ、増やせ、増やせの繰り返し、時々、自然界からの警告が出ていたのも知らん顔、海がもつわけがございません。真珠が死ぬるのも当り前です。「孫・子の代まで青い海を残そう」漁協の前にあるこのカンバンもほこりをかぶって今や信じるものは一人もいません。

そのあげく困った事がもう一つあります。忙しいのを理由にカネだけ渡して好き放題させてきた子供のしつけ、後継者のボンクラぶりです。「バブル」のつけがあちこちで出てきました。

遊子を孫子の代へ

何はともあれ、これから見て行くふるさとは、どういう事になるのか、どうして行きたいのか、これが私達に課せられた大きなテーマです。

荒れた段畑も助けてはくれません、美しかった海も元にはもどりません。日本経済も暗い話ばかりで、外に出ても生きにくい時代、やっぱりふるさとを大切にしなければなりません。

コマーシャルではありませんが自然にやさしく、昔の半農半漁に戻しつつ、遊子の特性を生かす道を考えなければなりません。

遊子の漁師はかつてまき網時代、漁労長も新人も同じ給料をわけていたそうです。あの天まで届くと言われた段畑も、孫・子の代に残そうと漁が好況の時に少しずつ上にひろげていったそうです。

親から引き継ぐ財産というのはお金ではなく、そういう永年つちかってきた精神ではないでしょうか。

「ローカルに生きる」ということは、これからも大変でしょうが、今一度若者と力を合わせ、遊子から発信することを考えてみたいと思います。

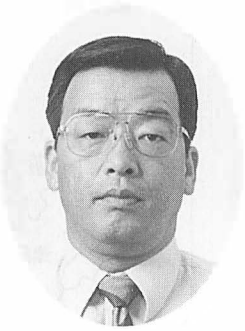
遊子水が浦の段畑

特集

ローカルに生きる―地域の足下を見つめて―

―癒しの里―
漆の梅の里づくり

漆を想う会
（中山町役場）　上ノ田　誠一



梅の由来

梅は、中国最古の薬物書「神農本草経」に登場する中国原産の薬用植物で、日本には、大和朝廷時代の七〇〇年頃に薬用として中国より渡来したという説と、自生していたという説とがあります。渡来説が有力とされており、果樹、鑑賞用花木として広く栽培されたらしく、庭園や盆栽として花を鑑賞していた様子が、万葉の歌等によく詠まれています。

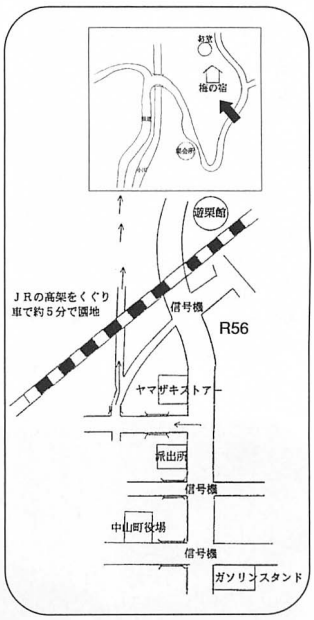
一方、梅干しが何時の頃から作られたかは不明ですが、梅干しの名が文献に記載されたのは、平安時代の村上天皇（九四六～九六七年）の病気の治療に、梅干しと昆布入りのお茶が用いられたというのが最初のようであり、この頃から既に薬用として考えられていたと言われています。

梅の里―漆

中山町には、この様に大変歴史ある梅とともに暮らしてきた集落「漆」があります。

漆地区は、世帯数十八戸、七十人程の、典型的な中山間の小集落です。町内を縦貫する国道五十六号線を内子方面へ南下し、近年オープンした都市と農村の交流拠点施設「栗の里公園」の手前を左折して、県道池田中山線を谷沿いに登って行くと、V字谷の中腹に広がる棚地に集落が見えてきます。集落内の伊福山（四三八メートル）には、中世の伊福城史跡もあり、当時の古戦を偲ばせる野仏や塚、神仏の信仰の深さを思わせる観音堂等もあり、国道から車で数分の場所にもかかわらず、静粛な隠れ里の雰囲気を醸し出しています。

〈漆周辺図〉



松山近辺で梅の名所と言えば砥部町の七折地区が有名ですが、この地区より開花が遅れること半月あまり。漆の魅力を知る人のみぞ訪れる隠れた桃源郷ならぬ「梅源郷」と言えます。

苦境に立つ漆の梅仕事

漆の梅は、四十年程前から先導的農家が、他の集落よりやや日照時間が短く、他の作物などは不向きなこともあり、傾斜地や棚地を利用して梅栽培に取り組んだのが始まりです。

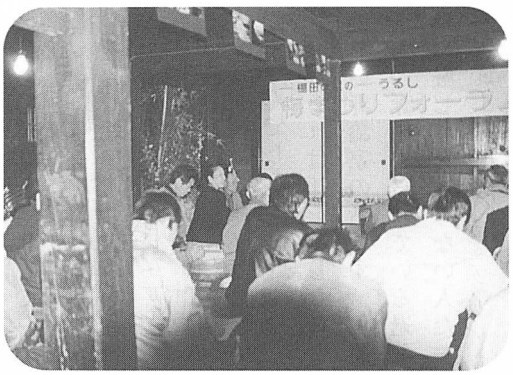
梅の酸味の主なものはクエン酸で、糖質の代謝を促進し、疲労でたまった乳酸を分解し細胞の老化を防ぐ効果があることなどから健康食品として見直され、そのブームを反映し、ここ数年全国的に梅の栽培面積と生産量が伸びてきました。平成二年当時と比較しますと、生産量は、三十五パーセント増の十二万二千トン

で、全国の消費量が十万トンラインと言われている市場から判断しますと厳しい現況下にあります。一方、県下の生産量も四十パーセント増の八五〇トン程度と予測されています。加えて、全国生産の大半を占める紀州産の梅が、関西市場を独占し、本県にはそこからから弾き出された阿波産の梅が、量販店を中心に流通しており、「鶯宿」、「白加賀」、「養老」、「紅梅」等を中心とした県内消費依存の青梅を栽培している漆地区にとっては、大ピンチで、梅栽培の衰退を懸念しているところです。

生産と梅林保全のマッチした梅の里づくり

こうした状況を打開する対策を求めつつ、梅林景観と生産がマッチした、県下一の梅林パノラマ「梅の里　漆」づくりを目指した「漆の梅まつりフォーラム」を、地区の廃屋「梅の宿」を利用し、「漆を想う会」を中心に、地域づくり研究会議の私設応援団の協力も得ながら地域住民挙げて開催しているところです。

フォーラムでは、町外の漆ファンの人も交えた学習会もさることながら、女性軍の梅づくしの手料理を肴に梅を愛でながらの吟醸酒「梅の宿」（蔵元奈良県）、梅酒づくり三十年の地元の千春おばあちゃん作の梅酒「千春」を飲み交わすのも人気の的です。平成七年～九年と過去三回の会を重ねる中で、地域住民の梅里づくりに向けての想いや意識（優木宣言―①梅の木を保全する。②生産性の高い優秀な梅の木を育てる。③集落の環境や隣近所の人びとを始め、来訪者にも優しく接する。）の統一もできつつあります。


梅まつりフォーラム

特に、女性軍が元気で、今年はバザーを試みるなど少しずつ梅の花同様に、梅の里づくりも開花しつつあります。

梅（うめ）ー話し

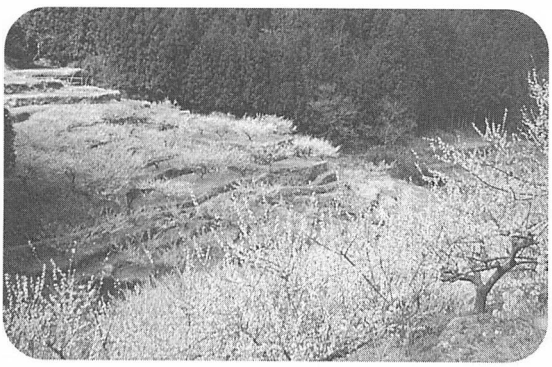
漆地区の梅林は長い年月と地域の人びとの努力により、生産環境としての景観を形成し、これから本町が目指そうとする二十一世紀の農村景観づくりの貴重なモデルであり、町の貴重な資源・宝です。

今後は、集落全体を公園化する「農村景観活用型公園化構想」づくりに取り組みつつ、農家経済に寄与する梅の加工工房や貯蔵施設の梅蔵等をはじめ、体験農園や廃屋の整備を行い、集落と梅の生産環境づくりを目指そうとしています。

また、梅の生産・加工・流通のみならず、暮らしと文化、歴史や風土等の地域の資源や条件を生かし、心身共にリフレッシュでき、人の心を育み癒す、都市と漆の住民が共に生きていけるシステムを確立したいものです。

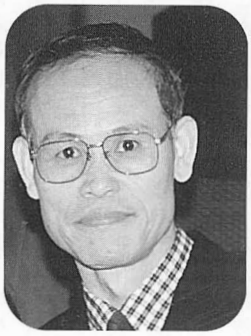
自称「漆の梅林ファン」の方の応援求む！漆の人びとの力になってやって下さい。

梅の花の美しさをずっと愛でるためにも！


漆の梅林

君が輝けば

広島県総領町　町づくり推進課長
（過疎を逆手にとる会オーナー）
和田芳治



不遜な営み

《過疎を逆手にとる会》発祥地としてまちづくりの世界では少しは名前の売れている総領町で、その名もヅバリの町づくり推進課長をやっています。

不遜な話ですが、過疎を逆手にとる会を組織した十六年程前には、総領町から発信する多くのニュースは、どこかに私の影が見え隠れしていました。

そんな総領町の営みを「個人主導だから駄目だ」とか、「行政主導だから本物ではない」と叩く人たちも少なくありませんでした。

でもそれは汗を流したことのない評論家の話です。民間活力が奪い去られている過疎地の厳しさを知らない人たちの無責任な指摘です。

どんな営みも最初は個人主導です。《すべてはあなたの夢から始まる。すべてはあなたの一歩から》です。気付いたものが、やれる方法でやり始めなければ何も始まりません。

「行政主導は駄目だ」と言っているだけでは何も始まりません。

「一人の百歩よりも百人の一歩」と足引っ張りにあいながらも、「一人の百歩で百人の一歩を引き出しても一歩は一歩だ」と言い聞かせて頑張った結果として、みんなの営みや民間主導の営みが始まります。

元気の産地総領町

日本で初めて障害者と高齢者が共に生活出来る《トータルケアホーム》を創り出した総合高齢者福祉施設ユーシャイン。「分からないから最先端」と言い訳しながらもチャレンジし続けるアースワークプロジェクト（芸術を活用した美しいまちづくり）。世界一のもちつき。《イベント上手の町総領町》の原動力のパフォーマンスが大好きなお母さんたち。「高齢者は光齢者」と《名人市》を立て続ける高齢者。他町のイベントに勝手に出掛けてヨイショ係を勤める民間まちづくりグループの《はやざき総領》・・・・。

世界一のもちつき

いま、総領町は《元気の産地》を合言葉に超元気です。私もその多くに関わって総領暮らしを満喫していますが、それらの主役たちは私ではあ

りません。

「総領暮らしは面白い！」と実感している人たちの自信にあふれた営みです。

ふるさとで輝く

私の町を始め多くの過疎地の親たちは、《努力に努力を重ねてふるさとを捨てさせる教育》をやってきました。

「田舎で生きてきた私のようになるなよ」と言う極めて情けない教育です。「そんなことはやっていない」と反発される方もありますが、「いい大学へ行って、いい会社へ勤めろ」と言う教育は、客観的に見れば《努力に努力を重ねてふるさとを捨てさせる教育》です。

その営みを断ち切り、ふるさとでいのちを輝かせて生きる力を付ける営みをやろうというのが、過疎を逆手にとる会の真の願いです。

そんな願いを受けて、昨年から《野の教育塾》が、まちづくり関係者と学校教育関係者の手で始まりました。

過疎を逆手にとる会の新会長の中田正俊さんは、子どもたちを対象に《自遊人楽校》をスタートさせました。

「都市がいい」「東京で成功しなければ成功したことにはならない」と言う物差しを変え、「ここが地球のど真中」と決めて、ふるさとでいのちを輝かす生き方を奨励し、そのための力を磨く営みが大浮上しています。

君が輝けば

「君が輝けば総領も」。永六輔さんが《総領の教育》を進めるために編集した総領読本《輝け総領》のために贈ってくださったことばです。

輝くと言えば、都市的集積の多い町が輝いていると思われますが、都市的集積一番の東京で、人間が輝いているとは私たちの物差しではとても思えません。

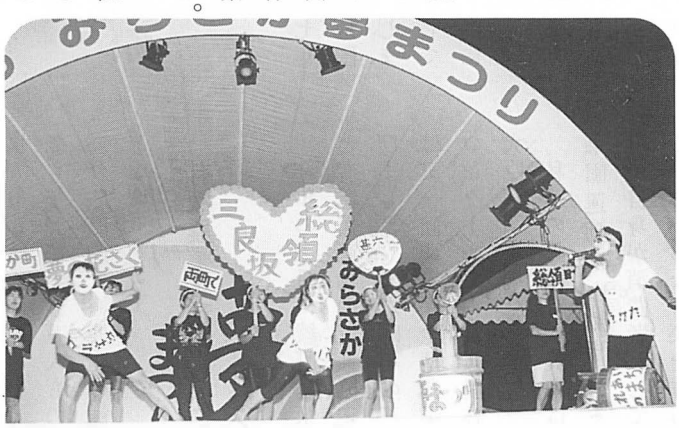
《人間が輝く町が輝く町》となると、超過疎の総領町にも希望が湧いてきます。総領町は、都市的集積は不十分ですし、今後どんなに頑張っても東京にはかないません。でも人間勝負なら負けません。

不便が培ってくれた創造力や主体性。あたたかなおつきあい。自然と共存する力。二十一世紀を輝いて生きる力を磨いてくれるのは田舎が一番です。

「まちづくりは人づくり」です。「何は無くても名所名物は名人が創る」です。

そんな人間を育てる教育は、努力に努力を重ねてふるさとを捨てさせる教育よりも心がはずみます。スペアーのある歯車（サラリーマン）を育てる（？）教育よりも素敵だとは思われませんか。

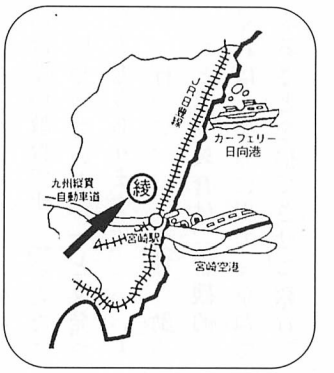
「ふるさとにとどめる教育は子どもの可能性を摘む」とか、「ふるさとに残れと言ってもどこにいい勤め場があるのだ」と、一見もっともらしい理屈を並べて、ふるさとを馬鹿めたり、《サラリーマンが一番》何て情けない価値観を信じている人たちに振り回されないで、田舎暮らしの面白さや素晴らしさを見せびらかせようではありませんか。



隣町の「みらさか夢まつり」でパフォーマンスするお母さんたち

キラリ光るまち
照葉樹林都市・綾

宮崎県綾町役場　黒木　政則



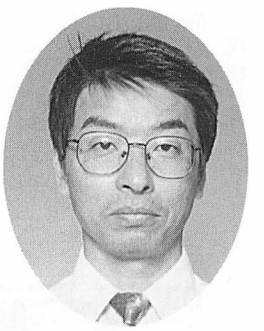
綾町の自慢は日本一の照葉樹林と名水百選に指定された清流です。そして、これらの資源を利用したさまざまな施設です。

綾町は宮崎県のほぼ中央部に位置し、宮崎市から西へ二十キロメートル、車で三十分の距離にあります。面積は九千五百二十一ヘクタール、このうち八〇％が山林で田畑はわずか八％程度です。人口は七千四百八十三人（平成十年二月一日）で、昭和五十五年の七千二百六十一人を底にして近年は少しずつですが増えつつあります。

照葉樹林の保全と活用

私達の町には日本一の照葉樹林の自然林が残っています。この森は国有林ですが、偶然残っている訳ではなく、昭和四十二年頃に伐採の計画があったものを町民運動により残してもらい、貴重な自然林が現存することになりました。

その後、国定公園の指定運動を展開し、それが五十七年五月十五日に九州中央山地国定公園綾地区として実現しました。国定公園には指定してもらいましたが、宮崎県内には風光明媚を嘱った国立・国定の公園がすでに四つもあり、ましてや山林など珍しくもありませんでした。どうにかしてここに日本一の照葉樹林があるのを知って欲しい。いろいろと考えて、森の景勝地に渓谷を跨ぐ大きな吊橋を架け公園として整備することにしました。



結果的にはこれが大当たりして、本町にとって大きな転換期となりました。大吊橋が目的で来た人も、その背景にある広大な照葉樹林に感動して帰ります。それが口コミで広がり、十五年近く経った今でも年間二十五万人もの人が訪れる県内でも屈指の観光地となっています。

有機農業を利用した町づくり

今年の三月に綾町は東京都と有機農産物の流通協定を結びました。また昨年の三月には第一回環境保全型農業推進コンクールで大賞（農林水産大臣賞）を頂きました。

私達の町の有機農業は一坪菜園運動から始まりました。町民自身が消費者として家庭でいろいろな野菜を作る。そして余った野菜を毎週水曜日の「青空市場」で交換するようになりました。自分達が食べるためですから、少々見掛けが悪くても気にしないし農薬も使いません。

数年経つと町外から野菜を買いに来る人がだんだん増えてきました。自分の作った野菜をわざわざ遠くから買いに来る人がいる。農業の新しい

方向がこれで開けました。

その後さまざまな施策により、自然生態系を利用した有機農業を展開し、生協や流通業者との取り引きが始まりました。昭和六十三年には「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、消費者のさらなる信頼を得て、取り引きは全国へ広がっていきました。

手づくりほんものセンター

町内での有機農産物の販売拠点が、平成元年に建設した特産物販売施設「ほんものセンター」です。ここでは町民が町内で作ったものなら何でも売ることができ、農産物を中心に年間約三億円の売り上げがあります。

手づくりの里・綾

現在町内には三十以上の工芸工房がありますが、このほとんどが町外からの転入者です。木材資源は豊富ですから木工をする人はいましたが、その他の陶芸・染織・ガラス等の工芸家は昭和四十年後半から転入が始まり、仲間が増えるようにして増加していきました。

町には展示会経費や借入金利子への若干の補助制度はありますが、このように増えた要因は、やはり広大な照葉樹林や名水百選の清流等の豊かな自然、そして町外者を受け入れる土地柄があるのだと思います。

自治公民館の町

綾町の特徴の一つに活発な自治公民館活動があります。町内二十二の集落それぞれには館長・各班の班長の外、高年者クラブ・婦人会・壮年会・子供育成会の代表がおり、また文化部・産業部・体育部・交通部を組織して、集落内のさまざまな事について話し合い活動しています。

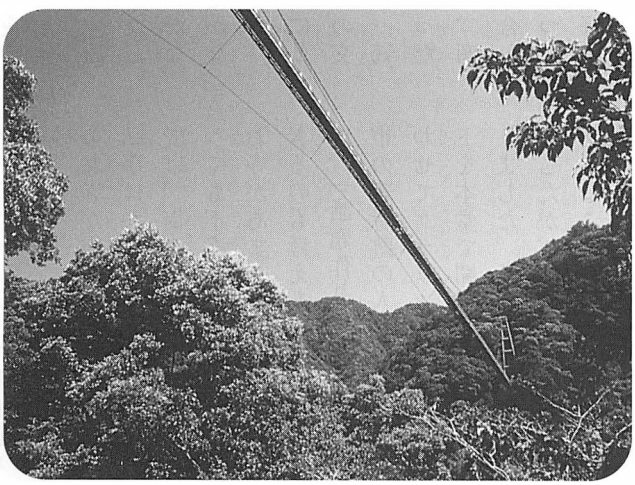
具体的には、郷土芸能の伝承・地区文化祭・地区運動会・十五夜祭・敬老会・花いっぱい運動・河川清掃・生涯学習活動・福祉活動等々、また各団体はそれぞれの計画に沿って活動しています。

毎月五日には二十二人の館長が集まる連絡協議会があります。この会には町長や教育長・関係課長も出席して、いろいろな事について話し合い、ここで決まったことが町全体の約束事になります。

照葉樹林都市・綾を目指して

私達の町は人口は少ないですが、照葉樹の木はたくさんあります。大都市ほど経済や文化の活動は活発ではありませんが、昔から受け継いだ生活文化が残っています。

このような自然と文化を大事に守り育て、本当に良い物を作っていけば、ますます住み良く、町外者の訪問や転入も増えていくことと思います。


照葉大吊橋

『商店街のお寺として』

伊予市
高橋　宏文

私は今、伊予市の灘町商店街の中にある栄養寺という寺院の住職をさせていただいています。このお寺は江戸初期（寛永十四年）に、灘町を開拓した宮内兄弟の発願により創建されたもので、灘町商店街とともに歴史を歩んできました。

ところがその商店街も、ご多分にもれず大型スーパーの進出に押されて近年は苦戦を強いられています。子どもの頃から慣れ親しんだお店が、シャッターを閉めたままになっていたり、取り壊されて駐車場や住宅に変わったりしてゆくのを見るのは、諸行無常の理とはいえやはりつらいものです。寺院は商売ではありませんから、私は商工会議所や商業協同組合のメンバーではないのですが（口の悪い人は「坊主稼業ほどいい商売はない」などと言いますが）、寺院創建の経緯などから誘われるままにいろんなイベントのお手伝いをさせていただいたり、活性化のための勉強会に顔を出したりいたしました。が、やはり特効薬はないようです。もちろん普遍的な特効薬があれば、全国の同様の問題はとっくに解消されているはずですよね。手作りの夜市が盛会のうちに終わり、後片付けをするとき、ほっとすると同時に感じる一抹のむなしさ。「こんなんでええんかな。自己満足なだけやないんかな。いつまで続けるんかな。」

でもそんななかで、私にとっての最大の収穫は人との交流でした。学生生活から一気に住職におさまってしまった世間知らずの私にとって、商店街の人たちとのお付き合いは、社会の厳しさと人のつながりの大切さとを学ぶ絶好の機会となりました。商店主には本当にいろんな人がおり、人の数だけ考え方があります。意見の違いから時には対立することもあります。が、みなさん懸命に街を思い、そして自分の生活を支えてがんばっておられるのです。お酒を酌み交わしながら（生臭坊主ですみません）街の将来のことなどを話しているときなど、お寺もまた、街の一部として重要な位置を占めているんだなと気付かされます。山奥の修行寺ならいざ知らず、街中のお寺が街と遊離して、わが仏事ばかりに専念していたのでは、街にとってもお寺にとっても不幸です。かといってお寺があまり俗っぽくなりすぎるのも考えものですね。以前、「話題作りになれば」と、市の若者塾の人たちと手を合わせてクラリネットコンサートを本堂で開催したこともありました。多くの方には好評でしたが、一部では「お寺であんなことやって」との批判もあったようです。難しいものですね。

活気のある商店街のなかで安らぎを与える寺院空間、みんなが自然に集まってくる憩いの場。そんな夢を見ている私ですが、「言うは易し」で、そのためには何をどうすればいいのかがなかなか見つかりません。どなたかいいアイデアがあれば教えて下さい。お願いします。

合掌

『走る、動く、叫ぶ』

松山市
野本めぐみ

まちづくりとは何だろう。誰でも町全体が明るく、夢と希望に満ち、安全で、美しく、人の善意にあふれていた方が、快適で暮らしよいし、幸せを感じられるだろう。自分の住んでいる町である。一部の人だけに苦労を背負わせるのではなく、皆が積極的に、それぞれの生活の上で、また社会の中で、善や美、あるいは利益といった価値を創り出そうと努力することこそ、まちづくりの理想的なあり方であると同時に、そうした人々の生き方それ自体にまちづくりの完成もあるのではないかと思われる。

昨年の夏以来、あるご縁から、お付き合いさせていただくようになった障害者の働く福祉作業所「ころころ」の所長さん、大石澄江先生の日々のご活躍に思いをはせる時、私の心に浮かぶ言葉がある。それは、「元気」と「勇気」。

作業所の運営はとにかく忍耐のいる仕事である。「障害」と一口に言っても、さまざまな種類があり、一人ひとり重さも違う。中には突然具合が悪くなったり、発作を起こしたりする人もいるらしい。そうした通所生の心身両面にわたるケアをしながら、地元企業からの下請けの仕事やバザーで販売する手作り品の制作といった作業を、皆が少しでも早く覚え、きちんとこなしていけるようにと、くり返しくり返し、辛抱強く指導していく。

障害者の福祉の向上を目指す運動をすすめていくには、考え方も方針も異なる他の作業所とも、うまく連携していかなくてはならない。

資金ぐりにも頭を悩ませる。「ころころ」のような無認可の作業所（民間の運営する小さな作業所）への行政からの補助金などは微々たるもので、職員のお給料をまかなうのにも事欠く有様であり当然それだけではやっていけないので、仲間たちと共に働いて得るわずかな賃金とバザーの収入、親たちの自己負担金によってなんとかやりくりしているというのが現実のようである。

現在、こうした無認可の作業所は全国に四千程あり、これからも増え続けるだろうと言われている。作業所の人達とのふれあいを通し、また各種イベント等にボランティア・スタッフとして参加させていただく中で、行政の側の対応の遅れを実感している。もとより、お金で解決する問題ではないが、こうした庶民の尊い志が、「行政の重い腰」という厚い障壁の前にくじかれていくようなことがあるならば、こんな無残なことはないだろう。

どんな人にも、幸福になる権利がある。

どんな人でも、自信と喜びをもって生きられる社会を作りたい。

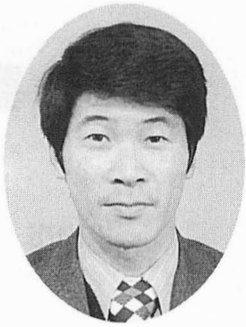
制度と人間の心の中に積み上げられた、差別という名の固い壁に穴をうがつ渾身の労作業に、あえて自ら身を投じてゆく所長さんや職員の皆さんの姿に、私はそんな祈りと願いを見たのである。

リレーでちょっトーク

—いきいきグループ紹介—

“豊友会”

会長　大本　昭裕



豊友会の誕生

弘法大師開山の霊峰・金山出石寺のふもとに広がる豊茂地区（世帯数二百三十戸、人口約七百人）で、自分達の住んでいる地域を守ろうと、青年団を卒業した成年が集まり、地域の将来を考えていこうと、昭和四十二年七月に発足したのが「豊友会」である。

豊茂地区は、ＪＲ伊予出石駅から大和橋を渡って、金山出石寺へ向かって約十キロメートル程走った所に位置する緑豊かな中山間地帯である。

昭和四十二年といえば高度経済成長の絶頂期であり、長浜町では臨海部を埋立てて第一次開発事業がスタートした時でもある。このような社会情勢の中で、青年団を退いた青壮年を中心とした後継者達が同じ地域に住んでいながら、年に一度も顔を合わせることがなく、お互いに何を考え、どんな生活をしているのか「先ず話し合う場を持って地域のことを考えてみよう」と十五人で発会式を行い、会の名称も地名の豊茂の豊をとり、豊かな友の会「豊友会」が誕生した。

三つの基本目標

発足以来三十年間、「①豊友会は地域発展のため積極的に取り組む②会員相互の親睦を深め、助け合いながら地域の輪を広げ、心の触れ合う豊茂づくりを進める③研修を深め文化的で心も豊かな地域づくりを目指す」という三つの柱を基本方針として、年間事業計画をたて、月一回程度集まり、話し合いの場を持つよう努めてきた。

話し合いの中で、地域の色々な問題が浮き彫りにされ、昭和四十年代には公衆電話の設置要望や奉仕傘をバス停留所へ配布したり、町議会・県議会の傍聴、先進地への視察研修、講師を招いての研修会等を実施してきた。

特に、平成三年にスタートした「豊茂ふるさとまつり」（十一月第二日曜日開催）では、メンバーの一人が飼育しているイノシシを使った猪肉や猪鍋の販売、餅つきなどを行い、活性化の一翼を担っている。

アジサイの里づくり

この緑豊かな自然と人情味ある地域社会を次の世代に引き継いでいこうと、最近では「自然との共生」を合言葉として、「アジサイの里づくり運動」に取り組んでいる。金山出石寺の参道には約三万本のアジサイが植栽されており、梅雨から初夏にかけて訪れる人々の心を和ませてくれている。

「交流」は地域づくりのキーワードとされているが都市と農村との交流を進めていくには、先ず受け入れる地域のホスピタリティを高めていくことが大切であり、その一環

として二十一世紀に向かって二十一万本のアジサイの里づくり運動を展開している。

アジサイの苗づくり

資質向上のために、高知県春野町のアジサイロードの視察研究や内子町の石畳の宿、古久里来へ出かけ、グリーンツーリズムについての体験学習なども行っている。

発足三十周年記念大会

今年度は、豊友会が発足して三十周年という記念すべき年であり、これまでの歩みを振り返るとともに、今日まで支えて頂いた地域や関係者の皆さんに感謝し、これからの豊友会のあるべき姿、住みよく活力ある地域づくりを探るため、平成十年二月一日に、豊茂公民館において、来賓、地元関係者、約八十人が参加して、「豊友会発足三十周年記念大会」を開催した。

式典のあと南海放送の永野彰子さんを講師に招いて「取材をとおした都市と農村の交流」と題して講演して頂き、引き続いて「交流を生かした魅力あるふるさとづくりをどう進めるか」をテーマに、パネラーとして内子町から古久里来の森長照博さんらを迎えて地域づくりフォーラムを開催した。

アンケート調査を実施

昨年十月には、地区民を対象として「魅力ある豊茂づくりのためのアンケート調査」を実施した。その結果、豊茂の良いところは「静かである」「のんびりできる」との答えが多く、逆によくない・心配な点を尋ねると「働く場所がない」「若い者が少ない」ということが指摘されており、過疎化・高齢化が進行していく中で、二十一世紀に向かって不安を持っていることが伺える。豊友会に対しては「地域をリードしていって欲しい」などの意見も出されており、会員の一人一人のレベルアップを図りながら、地域の輪を広げつつ先輩の築かれた歴史と伝統を引き継いでいきたいと思っている。

今後の課題

現在会員は二十八人と減少してきているが、今後の課題としてこれからも豊茂で生活していくという共通点にたって問題点を探りながら、女性の感性を生かし、会の活性化を図るため、女性の会員の勧誘に努めたいと思っている。

又、豊茂地区の主産業は農林業であり、現在は決して明るい状況ではないが、安全で新鮮な食物を供給するという「食文化」の視点に立ち、研修を深めながら自然と共生できる地域づくりを目指していきたい。

最後に、二十一世紀を背負ってくれるリーダーを養成するため、青少年の健全育成と合わせて人づくりに努めると共に、地域のコミュニティを大切にして、会員一人一人が豊茂に自信と誇りを持って楽しく暮らせるふる里づくりを目指していきたい。

30周年記念大会フォーラム

―研究員レポート―
臼杵のまちづくり
西瀬戸まちづくり・むらおこし交流事業に参加して

研究員　井上　正男

はじめに

当日の朝、臼杵行きフェリーの出航まで、時間があったので、八幡浜市内をブラリ散策することにした。

商店街の一角にあるギャラリーで「絵手紙展」が開催されており、ふと、絵手紙で村おこしをしている栄村の事例を思いだし立ち寄ってみた。

中央には、さりげなく、生け花が飾られ、特産のミカンが置いてあり、このような暖かい雰囲気がお接待の心と言うものかと思った。

数ある作品群の中で「人に出会い、私は育つ」という言葉の絵手紙がとても印象に残り、偶然とはいえ、今回の研修目的の道標に出会ったような気がした。

大分県臼杵市の概要

臼杵市は永禄五年（一五六二年）にキリシタン大名として知られている大友宗麟が、臼杵湾の丹生島に城を築き、城下町として発展した。一六〇〇年ウィリアム・アダムス（三浦按針）が乗っていたオランダ船リーフデ号が漂着してからは、南蛮貿易港として西洋文化輸入の異色ある国際都市となった。

現在、人口は、約三万六千人で、昭和三十年の約四万七千人をピークに減少傾向にある。

産業は醸造業を基幹産業としており、味噌、醤油の生産量は九州全体の三割を占める西日本有数の醸造の町である。

観光として、平成七年に国宝昇格した臼杵石仏、歴史と文化の香り漂う臼杵城跡、武家屋敷等があり古い町並みを形成している。一方、フグ料理は絶品で「見て、食べて、遊べる」観光地で、四季を通じ、年間約五十万人の観光客が訪れている。

臼杵市のまちづくりの背景

旧城下町は明治時代に鉄道沿線から外れ、交通体系も海上から陸上に移ったため、発展から取り残された。そのため武家屋敷、土塀、町家、寺院等が昔のままの町並みで残ったことが良かった。

しかし、これらの建物の老朽化にともない、取壊し、増改築、その際の道路拡張整備等の様々な問題が持ち上がってきた。

そのような状況の中、民間人が中心となり、これらの文化財を残そうという気運が高まり、県外視察研修等を重ね、昭和五十年「臼杵保存修景研究会」というまちづくりグループが結成され、その後、「臼杵の美しい町並みを守る会」、「臼杵歴史景観を守る会」へと発展した。

「臼杵歴史景観を守る会」の活動

守る会は市報のコラム欄で「私たち城下町」の連載、住民を対象としたアンケート調査の実施結果を市民に公表したりして、町並み保存に関する市民の知識、関心を高めていった。

そんな中、守る会が中心となり、昭和五十八年に「全国町並みゼミ」が、臼杵市で開催されることとなり、町並み保存運動に一層の拍車がかかった。

昭和六十年、「日本ナショナルトラスト」による臼杵の町並み調査がおこなわれ、その調査報告書が提出されるにあ

たり、臼杵に残る歴史的な建造物や景観のすばらしさを再発見し、全国にアピールすることとなった。この時期を契機に市民の町並み保存に対する意識も一段と高くなり、静かな歴史的町並みを活かしたまちづくりが推進され、周囲の景観に配慮した料亭、割烹等の新築、改築等はみんな和風の建物にするようになった。

行政との連携と今後

行政も昭和六十年、全国に先駆け、「臼杵市歴史的景観保存基金条例」（市民や企業と市費による基金づくり）を制定し、その後「臼杵市歴史的環境保全条例」（歴史的景観についてその保全地区やその保存方法を定めた）、「臼杵市歴史環境保全事業」（歴史的町並みに調和する家の新築、改修、門塀の改修等に対して僅かではあるが補助金を支給）の一環として、「二王座歴史の道」整備事業を行った。電柱を取り払い、電線を地下に埋め、道路に石畳を敷き、街路灯、案内板等を設置することにより、以前にもまして歴史的風情を増した。

散策してみると、寺院、白壁の土蔵、武家屋敷等が混在して、町屋の路地があり、まるで三百年前の昔にタイムスリップした錯覚を覚えた。

平成七年から、「まちづくり推進ネットワーク事業」として、市内まちづくり団体の代表者による討論会を実施し、将来なんらかの取り組み（例えばイベント）に繋げるように展開している。

また、平成九年から、伝統的建造物群保存地区の指定に向けて検討中である。

過去において、行政主導で整備事業を実施し、市民の意見で事業計画を見直し中止した経過もあり、民間と共にパートナーシップのまちづくりをモットーに住みたくなるようまちづくりを目指し、将来は、二王座と町屋地区を繋ぐ散策ルートの整備を考えている。

臼杵市の宝である歴史的町並み、文化的遺産（素材＝本物―文化財調査を今後も継続する）を活かしたまちづくりを目指す。

二王座歴史の道

まちづくり活動を振り返って

まちづくり総合センターへ出向して早いもので二年、光陰矢のごとしでした。センターの活動を通じ一番感じたことは、まちづくり活動家（リーダー）にお逢いしたり、ご講演を聞いたりした時、大変元気付けられたり、元気が回復することが多くありました。どんな栄養ドリンクを飲むよりも、即効性があること請合いでした。先般の長野冬期パラリンピックの選手のスピード感溢れる競技やあの笑顔に魅せられた人は多かったと思われます。

そのどちらも、マイナス思考をプラス思考に変える発想法で、いかなる困難も乗り越え目的にかける熱い想いの無言のメッセージが共感を覚えたのではないかと思います。

元気とは気が元に戻ることを言い、気が病になれば病気というそうです。

みなさんからいただいた元気（プラス思考）で、本当の気（本気）で、センターで体験したことを今後の活動等に活かしたいと思っております。本当にお世話になり有難うございました。

ローカルに生きる

― 四国遍路文化に学ぶ ―

えひめ地域づくり研究会議「'97年度フォーラム」レポート

研究員　伊手　博志

はじめに

一月二十四日（土）、暖冬といわれた今年の冬には珍しく雪がちらつく。そんな震えそうな寒さの中、えひめ地域づくり研究会議の九七年度フォーラムが開催された。

今回のテーマは、「ローカルに生きる―四国遍路文化に学ぶ―」であり、話の切り口として四国遍路にスポットがあてられた。会場も四国霊場五十八番札所の仙遊寺（越智郡玉川町）に移し、久し振りに松山以外での開催となった。

以下、勝手に私見を交えて報告をさせて頂きます。

癒しと遍路

予定の時刻になり、無事開会。はじめに堀内統義さん、森原直子さんによる基調対談が行われた。お二人とも日本現代詩人会の会員であり、詩というものへの関わりから感じる癒しというもの、さらに遍路というものについてじっくり聞かせていただいた。

堀内さんは、「詩は白紙の中を一歩一歩進んでいく、それは遍路道を歩くのとすごく似ているように思う」「遍路では普通の人が体現して支えあっている。そこに人間の癒しの原点があるのではないか」と言われた。

森原さんは、「癒しは案外自分達の身近なところにある。詩を書くこと自体も癒しではないか」そして、「探していたものが徐々に形となって自分の中に溜っていく、遍路とはそういう作業ではないか」と話されていた。

この対談の中で、「無用な事物の大まじめな探索者」という言葉が聞かれた。これは、まちづくり人が常に持っている意識ではないだろうか。そして、無用の事物だけでなく、有用と無用の狭間の中にある事物、それを大まじめに探していく作業も、もしかすると一つのあり方かもしれない、そんなふうにも感じられた。

交流が育てる地域

第一分科会は、内子町の岡田文淑さんを提言者に迎え、ヘロン久保田雅子さんの司会で進められた。

岡田さんは、「交流とは異質なものが入り混じること」であり、「今の農村は都市と同質なまちづくりをしている」「自分で誇るべきものを見失っている」と述べられた。そして、「既存の価値観の根底を置き換えないと、地域は見えて来ない」と問題提起をされた。

基調対談風景

岡田さんが持って来られた絵画集には、一九五三年のスイスの農村風景が描かれてあった。数年ごとに変わっていくその風景は、一見すると近代化してきれいになって行くように見える。しかし、逆に農村が本来持っていたものが失われていく様子が、すごく鮮明に感じられるのである。同じことが日本のほとんどの農村でも行われてきた。

本来「町並みも村並みも暮

らしと文化の中にあるべきもの」、そこのところを今一度問い直す必要があるのではないだろうか。

遍路に見る癒しの地域づくり

第二分科会は、渡辺浩二さんの司会で進められた。そして、主役は小山田憲正さんである。今回の会場となった仙遊寺の住職であり、四国遍路文化に熱い思いを抱かれている。

小山田さんは、「西洋文化ではなく、日本の文化にもっと誇りを持つべきではないか」、そして、「四国には千数百年続いてきた遍路文化」があり、これは「世界文化遺産に匹敵する文化である」と熱っぽく語られた。

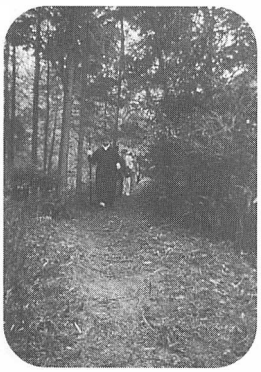
遍路は、巡礼文化でありながら「単なる宗教儀式ではない」お接待、例えば善根宿や茶堂でのもてなしなどにより、「地域住民も加わった〝癒しの場〟」としての文化が育まれてきている。

「四国人が誇れる四国の価値を再認識」し、深く探っていく作業の中から、地域に埋もれている財産や文化を見つめ直す。そして「後世に伝えていく役割が、私達にはある」そう語られた言葉が印象的であった。

歩キ目デスと遍路みち

地域には、埋もれたお宝が数多くある。それを見つけるウォッチング講座、第三分科会は岡崎直司さんを講師に迎え、塩崎満雄さんの司会で行われた。参加者の準備はもちろん目玉、そして好奇心である。

岡崎さんの集められた宝の数々、それをスライドを通して見せていただいた。なにげなくでは見過ごしてしまうもの、その中からきらりと光るものを見つけ出す眼力、やはり、さすがと唸るものばかりであった。また、数日前に実際に会場周辺の遍路道を歩いた時の様子なども紹介していただいた。



▶「歩き遍路」で癒しの体験

よく岡崎さんが言われている、ちょっと見る、じーっと視る、心の目で観る、この極意の大切さをすごく感じたひとときであった。心で観れば、地域の宝もきっと見えて来るにちがいない。

特別企画は、歩き遍路

フォーラムの翌日、希望者による歩き遍路が行われた。三時間という短い時間でありながら、木々の間を抜け、落ち葉を踏みしめながら、各自思い思いに遍路道を体験していたようである。ところで、参加された皆さん、少しは心が癒されたでしょうか。

おわりに

今回のフォーラムでは、地域を見つめ直すことの大切さが特に言われていたように思う。どの地域にも歴史があり伝統がある、そしてそこから文化が育まれてきた。しかし、そこに住んでいる私達が気付かないために、隠されたままとなっている宝物も数多くある。そうしたものの再発見、再評価、さらに地域住民としての生き方を、今一度じっくりと考え直す時ではないだろうか。

私自身、大変充実した時を過ごさせて頂いた。交流会も含めて、抽象的ではない、本当に人の顔が見えるところでのまちづくり論議が交わされていたように思う。

最後に、参加された皆さんに敬意を表すると共に、このフォーラムを開催するにあたって何かとお世話になった皆様に、誌面を借りて心よりお礼申し上げます。

“MY TOWN„うぉっちんぐ
歩キ目デス&足ラテス

第三弾

岡崎　直司

早くもこのコーナーは三回目に突入。ナニゴトも、先を想えば長いが、振り返ればアッという間の出来事。

と、まあそれ程感慨にふけるようなコッチャありませんが、今日はどんな物件が飛び出すやら、早速授業開始といきましょう。

カラン、カラン、カラン。

あ、コレ一応始業時の鐘の音。と言っても、今どきの若え者はチャイムしか知らんだろうから、ちょいと説明をばしときやしょう。

昔の小学校なんかでは、必ず用務員さんというおじさんが居て、授業の始まりと終わりに、持ち手の付いた鐘を振って、それを知らせていた。当然校舎は鉄筋ではなく木造、振り場所は全校に聞こえるよう真ン中へんの渡り廊下あたりか。おじさんのスタイルは、一寸汚れめの白シャツ、それも貝ボタンのヤツ。そしてヒザの抜けそうな黒っぽいズボン。腰には必ず手ぬぐいブラ下げて、これが大体定番であった。判り易いイメージで言うと、映画「二十四の瞳」に登場するような学校。

アリャ、若人には余計ワカらんようになったかも知れん、トホホ……。

“愛のイス”物件

さてオタチアイ。一時間目のテーマは「バス停」について。これがアータ、結構面白いんでございますよ。

どちらかと言うと、キョービ、全国隅々までモータリーゼーションが浸透し尽くして、一家に二台はマイカーのある時代。電車網の発達した都会ならイザ知らず、軽トラ常備の田舎なら、共稼ぎ夫婦が普通乗用車と嫁ハンの軽乗用車、ナント一家に三台ですよ三台。それにトラクターや耕うん機まで数えてた日にゃ、家が車だらけでアリマス。

これはもう、バスが完全にマイナーな存在になってしまった事を証明してます。そんな事ですから、免許を持ってない女性や子供、そしてご老人たち、彼らがバス路線では主役です。でも、社会的弱者（個人的に好きな言い方ではないが）と呼ばれる人達に支え

①

られているバス路線には、だからなのかどこか愛しいものが感じられます。

今回ご紹介する写真は、そんなほほえましさの逸品を取り揃えました。

①は、誰かが持って来て置いたイス。JRなどと違って、時々の道路事情で到着時間にズレが生じ易いバスは、まだかまだかとしばらく立ちん棒のコトもよくあるケース。そんな時、ちょっと座っていられたら、特にお年寄りには有難い。そんなワケで、いらなくなったイスを捨てるには惜しいってことで、持ち込んだのだろう。で、捨てたのではない！という強い意志表示が、「バス停専用」の文字に見てとれる。

こうした〝愛のイス〟物件は、全県下的にはどうなんだろう。八幡浜界隈には、やたらと目に付くが。

②は、野村町で見つけたもの。これもヤハリ、もう不用になったイスたちの第二の人生オンパレード。学校で使ってたものだろうか。小さ目のイスだから、ひょっとしたら小学校か？詮索は大きなお世話だ。

何れにしても、8ツのイスたちが、バラバラにならないよう足並揃えてバス停に来る人を待っている。

③は、究極の〝愛のイス〟。これも、どこかにあった、事務用イス、しかも車付き。そして、どっかのおじいちゃんとおばあちゃんが、たまたま同じバスを待つ間一時の出合い。一つしかないイスを分けあって、とても素敵な光景。車付きの不安定なイスの為、しっかりとポールを握ったおばあちゃんの両手が何だか楽しい。

私のお気に入りの一枚である。

さて、二時間目は、実は植木鉢物件という予定であったが、一時間目がついつい夢中になり過ぎて時間が足らなくなってしまった。受講生諸君、ゴメンナサイ。次回をお楽しみに。

ともかく、そうした何気ないテーマで、町を横断的に見てゆくと良い。きっと何かが見つかるハズ。では、どこかで〝愛のイス〟を見つけたら、是非まちセンまで一報を。

諸君のコーナーを設ける事も検討中。

ふるさと交流館『さくらの湯』オープン

川内町

国道十一号から少し東に入った高台に、温泉を活用した交流施設「川内町ふるさと交流館」がオープンしました。

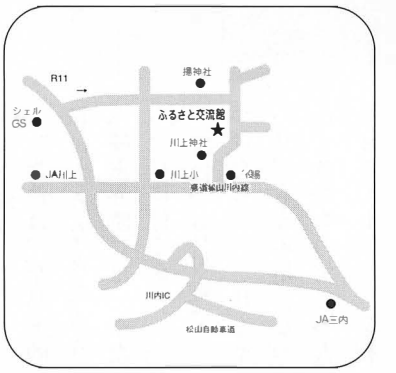
昔の茅葺きの家屋をイメージした高屋根は、周辺の緑とマッチして厳かな雰囲気を醸し出し、道後温泉にも引けを取らない泉質の川内温泉を引湯した浴場施設は、一度入れば何度も訪ねたくなること受け合いです。

また、交流室・研修室も完備され、トレーニング機能を備えた健康管理室、温泉熱を利用した温水プールなど利用客のニーズに幅広く応えられる施設内容となっています。

〈開館時間〉
午前十時～午後十時

〈休館日〉
毎月第一・三水曜日

〈問い合わせ先〉
☎（〇八九）九六〇―六五一一
FAX（〇八九）九六六―一四五五



保内町文化会館『ゆめみかん』4月オープン

保内町

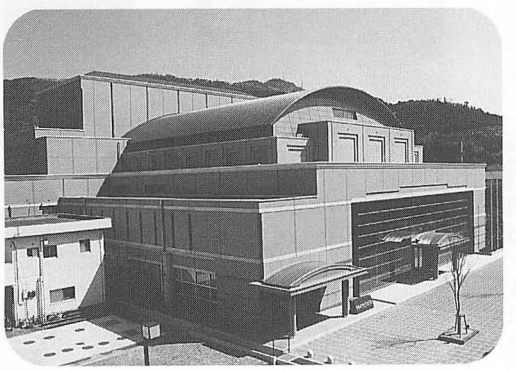
保内町文化会館は夢を見る・夢を持たせる文化会館にみかんを重ね、愛称は「ゆめみかん」と命名されました。

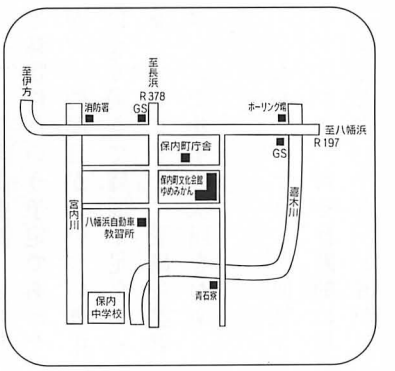
一階にはハイレベルなコンサート、演劇、公演などを楽しむことのできる八百十二人収容の大ホールと七月に開館する図書館、二階にはミニコンサート、講演会等に利用できる二百人収容のサブホールのほか、各種学級、サークル活動に利用できる研修室、和室等があります。

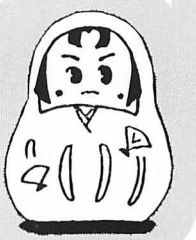
〈開館時間〉
午前九時～午後十時

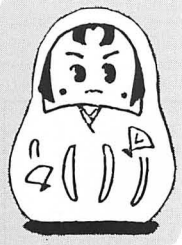
〈休館日〉
月曜日、国民の祝日の翌日（但し、土・日曜日にあたる時は繰り下げる）、年末年始

〈問い合わせ先〉
☎（〇八九四）三六―三〇四〇









丹原総合公園『耳金砦遊具広場』開園

丹原町

このたび、丹原総合公園内の南高台にある耳金砦遊具広場が開園しました。

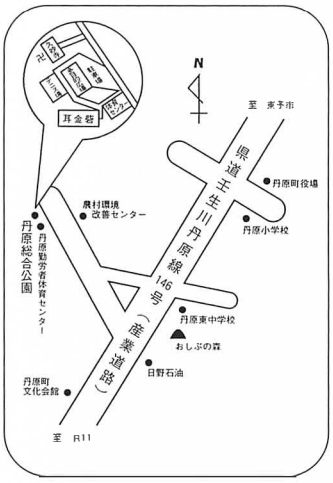
子供達に夢を与え、冒険心を育てようと、宇宙基地をテーマにした大型コンビネーション遊具です。

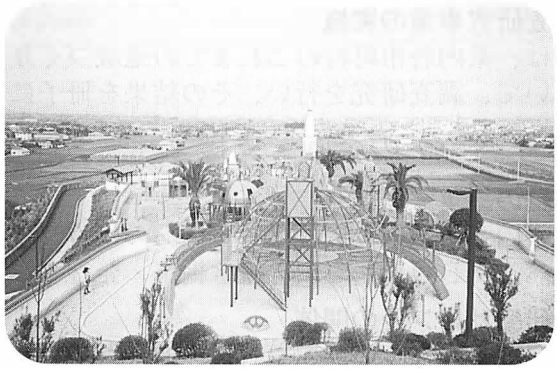
遊具広場より東に燧灘、南に石鎚山脈を眺望でき、四季おりおりの草花を楽しみながらの散策も出来ます。

〈開園時間〉
午前十時～午後五時

〈休園日〉
月曜日、年末年始
（月曜日が祝日の時は、翌日）

〈問い合わせ先〉
丹原町役場　教育委員会
☎（〇八九八）六八―七三〇〇





こだわりのみかんジュース!!加工販売開始 ㈱クリエイト伊方

伊方町

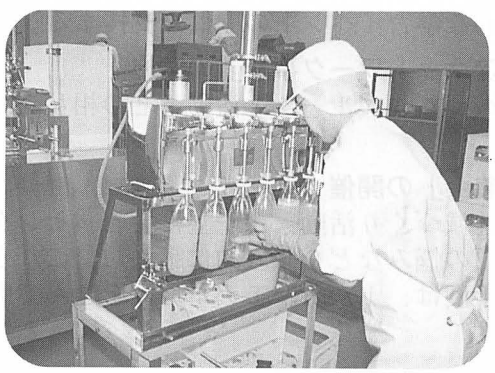
伊方町、㈱伊方サービス等、七団体の出資により平成九年九月に設立された、第三セクター「㈱クリエイト伊方」では、地元の農水産物を使った加工品の開発・製造を行っています。

今回開発した無添加・ストレートの「みかんジュース」はとても好評で、町の観光物産センター「きらら館」で販売しています。

贈答向け
七二〇cc×三本　化粧箱入り
定価　三千円

一般向け
一ℓ×六本入り
定価　三千円

〈問い合わせ先〉
クリエイト伊方
☎（〇八九四）三八―二一〇〇
きらら館
☎（〇八九四）三九―〇二三〇
ホームページ
http://www.shikoku.ne.jp/fikata/



(財)愛媛県まちづくり総合センター

平成10年度事業計画の概要

1　地域(まち)づくりに関する情報の収集・加工・提供、調査研究

①情報誌『舞たうん』の編集・発行

県内各地の地域づくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワーキング誌として、情報誌『舞たうん』を引き続き編集・発行する。

②情報発信機能の強化

地域づくり情報の個別需要に対し、新鮮かつタイムリーな情報を提供する。

平成10年度は、インターネットの活用、ホームページの開設に取り組むとともに、センター啓発用のリーフレット作成など情報発信強化事業を推進する。

③地域づくり調査研究事業の実施

平成10年度は、県内各市町村のこれまでの地域づくりへの取組みと将来の課題及び構想について、調査研究を行い、その結果を冊子にまとめて発行する予定。

2　地域(まち)づくりイベントの企画・支援

①イベント情報誌の編集・発行

年間を通じ県内各地で繰り広げられる、あらゆるジャンルのイベントを網羅した『えひめイベントＢＯＸ』を引き続き編集・発行する。(4月発行)

②「地域づくり研究サロン」の開催

地域づくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について、深く検討を重ねるため、専門家をアドバイザーとした、少人数のサロントーキングを行なう。

③「草の根地域づくり講演会」の開催

地域資源を活かし、ふるさとを誇りに思えるような地域づくりを、行政と住民が共創していくことを目指し、開催地市町村と共催で、地域づくりの先駆的実践者等を講師に招いて、講演会を開催する。

④地域づくりイベントの支援

県内の自治体や地域づくりグループが実施する地域の手づくりイベントに対して、後援などの支援を行う。

3　地域(まち)づくり活動の人材育成、ネットワーク形成

①「地域づくり研究アシスト事業」の実施

地域において自主的に活動する地域づくり研究グループ・団体が実施する学習研究活動や広域的な学習イベントの開催を支援する。

②「地域づくり交流ネットワーク事業」の実施

近隣各県の地域づくりグループ・活動者との相互交流に努め、ネットワークの構築を図る。

③「地域現場ミニ集会」の開催

地域の若手の地域づくり活動家が一堂に会し、センター研究員やＯＢである客員研究員と、日頃の悩みなどを徹底的に議論し、これからの地域づくりの方向をさぐる。平成10年度は、１か所、モデル地域を選んで開催する予定。

☆まちセンからのお知らせ

「草の根地域づくり講演会」開催地募集

㈶愛媛県まちづくり総合センターでは、地域資源を活かし、ふるさとを誇りに思えるような地域づくりを、行政と住民が共創していくことを目指し、県外の先駆的まちづくり実践者等を招いての講演会を、今年度、県下２か所で開催することにしています。

ついては、その**開催場所を提供してくださる共催市町村**（広域市町村圏を含む）**を募集**いたします。概要は、次のとおりです。

① 講師謝金とその招へい旅費は、センター負担
② 会場、看板等は、開催地市町村等負担
③ 講演記録集を、センターで編集・発行

「地域づくり研究アシスト事業」の支援申請受付

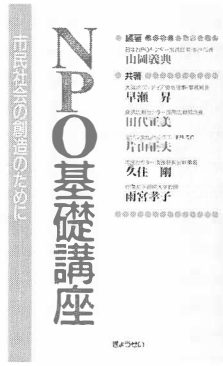
地域において、自主的に活動する地域づくり研究グループ・団体が実施する学習・研究活動について、㈶愛媛県まちづくり総合センターでは、今年度、３グループ程度の支援を予定しています。

① **支援対象グループ**
活発に学習・研究活動を行なっているグループで、原則として、会の運営が会員の会費によって賄われているところ
② **支援対象経費**
学習・研究活動のために招くまちづくり実践者等の講師の謝金

BOOK INFORMATION

●ＮＰＯ基礎講座
－市民社会の創造のために－
山岡義典　編著
四六版　2,000円（税別）
ぎょうせい

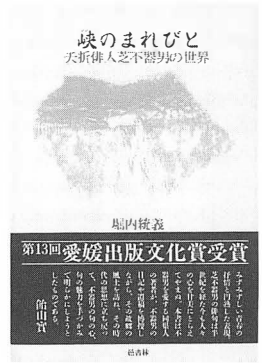
いわゆるＮＰＯ法がついに成立しましたが、日本ＮＰＯセンターの山岡さんが、ＮＰＯとは何か、自治体とＮＰＯとの関係などを、わかりやすくまとめています。



●峡（かい）のまれびと
夭折俳人芝不器男の世界
堀内統義　著
四六版　2,542円（税別）
邑書林

松野町出身の夭折の俳人芝不器男について、詩人である著者が、日記や遺稿をたどりながら、その心象風景にせまっています。

第１３回愛媛出版文化賞受賞。



春です。異動の季節です。

㈶愛媛県まちづくり総合センター　人　事　消　息

■平成10年度　センター職員（☆印は新しいスタッフです）

（後列左から）　主任研究員　藤田　享（愛媛県）　研究員　伊手　博志（津島町）

（前列左から）☆研究員　**小川　龍児**（県信用農協連）　所長　渡部　正人　☆研究員　**檜垣　明宏**（弓削町）

☆今年度は、このメンバーで、えひめのまじめな地域づくり情報誌「舞たうん」をお届けします。どうぞよろしくお願いいたします。

★４月１日付けで、研究員として勤務された２名が、それぞれの派遣(出向)元に帰られました。
これからも、客員研究員としてよろしくお願いいたします。

★　井上　正男（県共済農協連）

★　稲田　　紹（伊方町）

今回の取材でお目にかかった季羽さんは、まさに百の姓をもつ人、「百姓」という言葉どおりの方だと思いました。

外は春、桜の花も満開です。季羽さんが丹精こめてつくられた棚田米を原料にしたこだわりのお酒『鼻白き猫の話』を持って、花見酒とシャレこみましょうか。

ff

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790－0003
松山市三番町八丁目二三四
愛媛県生活保健ビル三階
㈶愛媛県まちづくり総合センター
TEL089（932）7750
FAX089（932）7760

発行／平成十年四月十日
㈶愛媛県まちづくり総合センター
印刷／三創印刷株式会社

本誌は、㈶愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。